

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学名誉教授

山口 徹

1970年代後半に吹き荒れた大学紛争との関わりの中で、研究と教育の融合を基本理念とし、外に開かれた大学の構築を目指す、一つの核として財団法人日本常民文化研究所を招致し、その再建を志した者の一人として、神奈川大学日本常民文化研究所(神奈川常民)の研究と教育の拡充を目指して創設された歴史民俗資料学研究科が、COEプログラムの“拠点”として「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマに、新たな研究を開始したことは喜ばしい限りである。

この研究科は「設置の趣旨」でも述べられているように「国際化がしきりに強調され、日本人が人類社会の中でいかなる役割を果し得るか、また果すべきかが問われている現在、我々日本人自身が誤りない自己認識を持つことは、特に緊急な課題となっている」との認識のもとに、真に学問的な研究の裏付けを持ち、広い総合的な視野に立った正確な歴史像を造ることを目的としている。そのための手段として「諸学を総合した資料学」の確立が必要であり、その研究と人材を育てる場として本研究科は創設されたものであった。したがって、本研究科創設の背景には渋沢敬三と日本常民文化研究所が持つ、我が国にはまれな独立の、しかも常に社会に向かって開かれた研究所としての伝統を現時点に立って批判的に継承する姿勢があった。

私たちは神奈川常民設立当初から文献に偏りがちだった歴史学の実状に対する反省を通して、考古学・民俗学・民具学をはじめ、自然科学の諸分野までも含む諸学の協力関係を深めるために、文献・民俗・民具・考古・絵画・建築等、日本列島における人間社会の歩みの中で残されてきた各分野の資料そのものについての綿密な学問研究を深め、諸学の協力の前提を確固たるものとする必要があると考えてきた。当面は旧日本常民文化研究所から蓄積されてきた文献史料学・民俗民具資料学を中心に「諸学を総合した資料学」の実現を目指してきたのである。したがって、歴史や民俗の創造の主体であり客体である人間社会の残してきた資料を文字・非文字資料を問わず、日本列島の人間社会の残した歴史や民俗を今日に伝える情報として利用する道を求めようとしてきたのである。そこではさし当たって、非文字資料を民俗民具資料に限定し、文字・文献資料との総合を果たすことを当面の課題としてきた。

このさし当たっての課題の限定が、今回のCOEプロジェクトの中で批判的にどのように継承され、発展させられてゆくか、神奈川常民及び本研究科創設に関わったものの一人として見守り、このプロジェクトに参加する諸学の立場を乗り越えた研究の積み重ねの中で豊かな成果が結実されることを期待したい。